

「福音主義者としての教父研究のモチベーション」

2009年5月18日

関西聖書神学校学監（当時） 金井由嗣（西部部会）

はじめに

中部部会の講演にお招きいただいたことを光榮に思います。私は、大学院の博士課程で教父による旧約知恵文学の解釈史を研究課題に選びましたが、5年間在籍しながら結局博士論文を書き始めることもできずに終わりました。研究の名に値する実績は何一つ残しておりません。本来なら学会で講演する資格は無いのですが、福音主義の立場で教父学を専門とする研究者がほとんどいない日本の現状を考える時に、福音主義者にとっての教父研究の意義について考えることにはそれなりに意味があると思い、一つのケース・スタディとして紹介させていただく次第です。

研究会議では準備不足のため前半の個人的な経歴ばかり話してしまい、肝腎の教父研究の意義について十分触れることができませんでしたので、この原稿ではその部分を補ったものを発表させていただきます。

1. 教父研究に導かれるまで

(1) 物理学を志して理学部入学、最初の挫折

私は最初、京都大学理学部を目指しました。中学2年生の時に学校の図書館で借りた一冊の本（『デモクリトスから素粒子へ』）をきっかけに理論物理学、特に素粒子論に興味を抱き始め、将来は京大理学部に進んでノーベル賞を取る、という大それた目標を持つようになりました。当時の私の成績は、そしてその後も、京大合格にはほど遠いレベルでしたが、大きな目標ができたことで少しは勉強するようになりました。高校生になってもなかなか合格レベルに達することはなく、教師からは志望校を変えることを勧められましたが、浪人覚悟で一度だけ受験する、ということで親や教

師を説得しました。

高校3年生の夏に、私は個人的にイエス・キリストを救い主として受け入れ、自覚的なクリスチャンになりました。自分が主のために生きる道考えたときに、中学生の頃から目指していた理論物理学がそれだと考えるようになりました。理系の高校生だった私は、クリスチャンの信仰と科学が調和できることを示すためにノーベル賞を目指そうと本気で考え、この進路は神から与えられた道だと信じるようになっていきました。

京大受験に際しては、前夜に一問だけ解いた問題がそのまま出題されるなどいくつもの奇跡が重なり、本来その実力のなかった私が合格することができました。1983年です。

ところが、実際に入学してみると周囲はことごとく私より優秀な人間ばかりでした(当然ですが)。自分に全く理解できない授業を易々とクリアしていく、頭の造り自体が違うとしか思えない「宇宙人のような」人々。彼らと競争してノーベル賞を目指すなど、自分には到底不可能であったことを悟り、入学してまもなく私はその夢をあきらめてしまいました。目標を失うと同時に大学に通う意味もわからなくなり、欠席を重ね、当然ながら授業にはついて行けず、留年を繰り返すことになりました。

人生の大目標を失った私に、神様は新しい召しを与えてくださいました。大学1年生の夏に参加した所属教団の青年全国大会の中で、伝道者・牧師としての献身へと導かれました。

すでに大学に通う意味を見失っていた私は、中退して神学校に進むことを考えるようになり、教会の新年聖会の後で牧師である父に相談しました。ところが牧師は、「あなたが今の大学に行っていることには必ず神様の目的がある。まずそれを全うしてから神学校に進みなさい」と、転進を認めてもらえませんでした。私の将来を真剣に考えた上での助言であることを理解し、改めて自分が大学で学ぶ意味を追求することにしました。4月から大学に通い直しましたが、1年前と同様何一つ理解できず、しばらく通っては力尽きて休む、ということを毎年繰り返しました。合計3回留年しました。

(2) 信仰者として大学で学ぶ意味を追求

私は次第に、クリスチャンとしての信仰と大学で学ぶ意味とをダイレクトに結びつけることが自分には必要だと理解するようになりました。そうでない限り、大学に通うモチベーションが得られないからです。KGK（キリスト者学生会）の活動に参加するようになり、ますますそうした課題について考えるようになりました。また KGK では、他の教派のクリスチャンと交わる機会が多くなり、様々な教理上の違いについて議論を交わす中で神学的に思考する力の必要を痛感するようになりました。

一方では早く神学校に進みたいという思いがあり、教会に来る神学生から神学校の教科書を聞き出しては自分で読んでいきました。大学に行かない分、時間はたっぷりありましたので、父の本棚にあった大量の神学書を手当たり次第に読み、さらに自分でも様々な神学書や哲学書を求めて読みあさるようになりました。

その中で、私に決定的なインパクトを与えた最初の本は、細川勝利『21世紀をになうキリスト者へ』でした。いわゆる「神学書」ではありません。しかし、この本に示された著者の姿勢、発想法に私は衝撃を受けました。クリスチャンの信仰とは、世界観・価値観の根本的な転換となって現れるべきものであることを、私はこの本を通して教えられました。

同じ頃に、KGK の高木実主事に勧められて、主に改革派系の弁証論に触れるようになりました。特に山中良知『理性と信仰』は、自分が取り組むべき課題の全体像を示してくれた本として、大きな影響を受けました。またコーネリアス・ヴァン・ティル *The Deffence of the Faith* も読み、その論理の明快さに教えられつつ、自分のよって立つ土台について改めて考えるきっかけを与えられました。

クリスチャンとしての世界観を構築することについては、唄野隆『現代に生きる信仰』やジョン・ストット『地の塩・世の光』からも多くを教えられました。これらの書からは世俗の学問を聖書の見地から再検討して取り組む必要についても教えられ、自分の専攻である物理学や自然科学についても一度科学論の形で学び直すきっかけにもなりました。これは後に、基督教学に進んでから芦名定道助教授（当時）が主催する「科学とキリス

ト教」の研究会に出席し、共著書『科学時代に生きる信仰』の執筆者に加わる機縁となりました。

(3) キリスト教学へ

理学部時代に独学で学んだのは、主に改革派系の神学・弁証学でした。一方、教会関係では主にウェスレアン・アルミニアン系の神学を学んでいました。中でも小林和夫氏の著作を通して、ウェスレアン神学の伝統を踏まえた弁証論の必要を覚えていた時期でもありました。これは単なる教派の問題ではなく、私自身の信仰体験に改革派系、特にヴァン・ティルの神学がうまく適合しない、という問題でもありました。信仰上の真理を理解する上で聖霊の内的証明が不可欠であるとするれば、神学はどこまで論理的であるべきなのか。ヴァン・ティルはその点を理性の新生(regeneration)の問題として扱うのですが、私はむしろ聖化の問題として信仰における理性の問題を扱った方が良いように感じていました。ギリシャ哲学の論理で信仰を語ることへの違和感もあり、その点は山中氏がすでに「理性と信仰」で扱っているところですが、自分なりにさらに掘り下げて考える必要を感じていました。

そのような時期に出会ったのが、有賀鐵太郎『キリスト教思想における存在論の問題』でした。信仰と理性の関係について私が漠然と考えていたことを明確に、しかもしっかりした学的方法の下に論じた同書に接して、私は「自分の求めていたものがここにある」という思いを強く抱きました。2回の留年後、理学部6年生の時です。有賀は京都大学文学部哲学科基督教学専攻の教授であった人でした。恥ずかしながら私は、6年目に至るまで自分の大学にキリスト教を専門に扱うコースがあることを知らずにいたのです。早速有賀の教え子であり、当時の主任教授であった水垣渉教授の研究室を訪ね、基督教学教室で学びたいとの希望を伝えました。理学部を卒業後に文学部に学士入学の道があること、同じコースをたどった先輩が幾人もおられることを知ったのは、この時であったと思います。最後の一年間で残りの単位を文字通り「かき集め」、かろうじて理学部を卒業、一年間アルバイトで学資を貯めた後で1991年、文学部哲学科基督教学専攻3年に編入しました。

(4) 思想史としての旧約知恵文学研究

キリスト教学講座では、水垣教授のゼミが有益な学的訓練の場となりました。原書で文献を読むこと、必要な予備知識はすべて事前に調べてくることなど、学の方法をそこで学ぶことができました。

また京大の哲学科という環境にあって、西洋の伝統以外の諸哲学を学ぶ機会が与えられたことも有益でした。転部を考え出した頃から仏教学に興味を抱き始め、梶山雄一教授の著書を中心にインド大乘仏教の哲学やそれに関連する思想に触れる中で、西洋の伝統から離れた立場で思索する可能性が開けてきましたし、そこからキリスト教の伝統における西洋的思惟の影響を批判的に検討する視座が得られました。

水垣教授の講義でキリスト教思想の基礎付けとしての旧約知恵文学の重要性について教えられ、卒論の題材として伝道者の書（コーヘレト）に取り組むことにしました。有賀の著書でも取り上げられていますが、キリスト教に固有の思考法と世界観について考察する上で、ヘブライ的思惟の中で普遍的思考を目指す「知恵」の思想を最初に理解する必要がある、との認識に立ってのことでした。卒業論文『コーヘレトにおける神と知恵』では不十分ながら同書全体の構造から思想的特徴を把握することにつとめ、修士課程でもその研究方法を継続しました。

私には西洋（ギリシャ）的論理で神学が構成されることへの疑問があり、その観点から知恵文学の中に神学の土台となり得る非西洋的論理を発見することを期待していたのですが、コーヘレトの中に発見したものはもっと根源的な、人間の理性そのものの成立根拠を問う姿勢でした。

(5) 神学校から牧会へ。博士課程での学び—旧約から教父へ

修士課程を終了した段階で学びに区切りをつけ、神学校へ進みましたが、神学校卒業後に牧会しながら博士課程の学びを続ける道が開かれました。以前の研究を踏まえることは当然ですが、私としては聖書学ではなく思想史をやりたい、との強い思いがあり、知恵文学を思想史の資料として扱う方法を模索しました。

神学校の卒業論文を書く時に、大学院時代に入手した知恵文学についての論文集数冊を読み返す中で、「知恵の人格化」の主題が浮かび上がってき

ました。卒論ではとりあえずベン・ウィザリントンの『賢者イエス』*Jesus the Sage*の議論を要約して批判を加える、という形でまとめましたが、その他の論文も平行して読み進めていきました。

箴言をはじめとする旧約や中間時代の知恵文書が初期キリスト教において「先在のロゴス＝キリスト」を証言するテキストとして解釈されることはよく知られていますが、その解釈がどのようにして成立していったかを「人格」概念を鍵に分析していくこととなります。旧約、ユダヤ教文学、新約それぞれの分野の一流の研究者がこの主題についての論文を書いていましたが、それぞれの視座の違いばかりが目立ち、議論が成立していないように思えました。博士課程での最初の研究テーマとして、それらの議論を整理して批判を加え、1999年の日本キリスト教学会で発表したところ、同学会発行の学術誌『日本の神学』に論文を載せていただくことになりました。批判の要点は「人格」の定義が研究者それぞれによって違うために議論がかみ合っていない、ということでしたが、論文にする課程でさらに考察を重ねることになりました。旧約聖書の「神の知恵」を「人格」（ペルソナ）として解釈するのは要するにキリスト論・三位一体論の根拠付けのためですから、あくまでも初期キリスト教思想におけるペルソナ概念の成立との関連で考察すべきこと、すなわち「知恵の人格化」は聖書学ではなくキリスト教思想史の主題であることを論文の結論としました。

論文はよい評価をいただきましたが、それ以上に自分にとっての収穫は旧約知恵文学をキリスト教思想史の題材として研究する方法論が確立できたことでした。博士論文の主題として「ロゴス・キリスト論の成立過程における知恵テキストの解釈史」を選ぶことになりました。学部の卒業論文から修士課程までは旧約テキストをもっぱら研究していましたが、その間も水垣教授の教父学の演習に参加し続け、博士課程では水垣氏の後任の片柳榮一教授から指導を受けました。教父学の背景の下で旧約テキストを読み続けたことが、上記の視点につながっていったと思います。

以上の経緯から、博士課程に至ってようやく教父学を専攻するようになりました。ところが牧師の仕事をしながらの研究は片手間にならざるを得ず、一方でテーマの性質上読むべき資料は膨大になり、最初の論文を発表

した後の研究はさっぱり進展しませんでした。2 世紀後半の教父エイレナイオスとテオフィロスに箴言の「神の知恵」を「聖霊」と解釈し、「ロゴス＝キリスト」と「ソフィア＝聖霊」を「神の両手」と呼ぶテキストがあることに気づき、それらがシリア・キリスト教の伝統とつながっているらしいこともわかってきましたが、その時期（牧会に入ってから 5 年後）に関西聖書神学校舎監への招請を受けて就任しましたので、研究は中断したままになっています。本格的に研究するためにはラテン語、ギリシャ語、アルメニア語、シリア語の文献を読み比べる必要があります、自分の能力を超えていることは明らかでした。

(6) 福音主義神学会西部部会研究発表（強制された恵み）

神学校舎監に就任した時から、研究の続行は時間的に不可能になりました。心理的にもその余裕は全くありませんでしたし、目の前の教育指導と校務に集中していました。ところが福音主義神学会の研究会議において、関係する神学校からそれぞれ研究発表者を出すことになっており、発表者が確保できないために責任上私が研究発表することが数回ありました。2005 年 4 月の西部部会春の研究会議で研究発表に当たることになり、その機会に大学院時代の研究をまとめて、中間報告のようなものを発表しました。研究史の要約と該当テキストの日本語訳での紹介、今後の研究課題を挙げるだけの簡単なものでしたが、私自身にとっては自分が取り組んできたことを整理する良い機会となりました。今後研究を再開する機会が与えられた場合のスタート地点が明確になりました。強制された恵み、といって良いでしょう。

2. 福音主義にとっての教父研究の意義

以上でお分かりの通り、私が教父学を専門とするようになったのは十分な見通しがあって自覚的に選んだというよりも、その時その時の課題に取り組む中で神様が一つの方向に導いてくださった、というべきです。それでも、あるいはだからこそ、私のにとっての根本的な課題であったクリスチャンとしての信仰と学問（理性）の関わり方を追求する上で、教父研究に主なフィールドを置くようになったことは良かったと思います。神学校

で教鞭を執るようになってからは、特に現代のポスト・モダンと呼ばれる状況の中で「聖書が神の言葉である」と言い切る福音主義の立場を自分なりに確立する上で、これまでの歩みで培われた思考法が大きな支えになっていると思います。以下、福音主義神学にとっての教父研究の意義について、自分の経験から思いつく事柄をあげてみたいと思います。

(1) 「神の言葉」の尊重

第一に、教父たちが聖書を神の言葉として読んでいった姿勢に学びたいと思います。現代の私たちとは違い、「聖書は誤りのない神の言葉である」との信仰告白が先にあったわけではありません。マルキオンの例にみられるように、正典の範囲さえも議論の対象となり得ました。けれども彼らは聖書の記述を権威ある神の言葉として受け取り、神について、救いについて、とりわけイエス・キリストとは誰であったのかについて、聖書の記述に基づいて論じ続けました。そこには強引な比喩的解釈もみられますし、エイレナイオスの「神の両手」モデルやテオフィロスの「三者(トリアス)」のように、後には顧みられなくなる神学的に未熟な表現も現れますが、それらは彼らが聖書の記述を余すところ無く神の言葉として受け取り、矛盾する箇所をも調和させようとしてホーリスティックに解釈しようとした努力の表れであった、としか思えません。聖書の言葉を自分勝手に取捨選択して都合の良いところや論理的に矛盾のない箇所だけで教理を構成する方法論は否定されました。聖書論・正典論におけるマルキオン論争の意義はそこにあったと思います。

教父たちにとって「聖書は神の言葉である」との前提は自明でした。異教世界に対してその信仰を証明するための努力(弁証論)がなされますが、キリスト者の内部で聖書が神の言葉であることを論証する必要は全くありませんでした。彼らにとって聖書は「誤りがないから神の言葉」のではなく、「神の言葉だから誤りがない」のです。福音主義を、聖書を神から来る権威として受け取る信仰的態度と定義するならば、キリスト教は最初から福音主義を当然の前提としていた、ということがよく理解できます。

(2) 解釈者としての思考の枠組み(思惟構造)を問い直す作業

3世紀初めのテルトゥリアヌスとオリゲネスが三位一体論とキリスト論

に明確な形を与え、4世紀のニカイア会議でそれらの教義と正典の範囲が公式に定められました。その前の段階、2世紀のキリスト教においては様々な教えが提案され、議論の俎上に載せられました。その中で聖書の記述に照らして問題のあるものは放棄され、論点がさらに深められていった結果が後の教義として定着したわけです。その意味で2世紀の教父は何が出てくるかわからない面白さがあるのですが、彼らを取り組んだ課題を解釈学の視点から整理しておきたいと思います。

先にも述べましたが、教父たちにとって聖書は全体が権威ある神の言葉でした。まだ権威ある正典（カノン）リストは定められておらず、若干の文書はリストに入れるべきかどうか議論がありました。それにもかかわらず、聖書に入れられた文書は彼らの教えを規定する物差し（カノン）として扱われました。そもそも権威ある文書群だからこそ、ある文書がそれに入るべきかどうかを慎重に検討する必要があったのでしょう。

教父たちにとっての共通の教養はギリシャ哲学でした。議論の基本的枠組み、語彙、論理の組み立てはすべてギリシャ哲学が用意したものを使うわけで、彼らには他の選択肢はありませんでした。ところが聖書の記述の中には論理的に相互に矛盾する箇所や彼らの常識（哲学）では受け入れがたい思想、表現も存在するわけです。彼らはそのすべてを神の言葉として受け入れ信じるために、様々な解釈を工夫して提示しました。それは聖書を基準として自らの解釈的枠組みを作り直す作業であったと、私は理解しています。彼らの記述には論理の乱れがしばしば現れ、強引な解釈も見受けられますが、それらは結局のところ、彼ら自身の論理的枠組みが聖書に適合したものとなるための組み直しのプロセスを示しています。このような思想的苦闘の結果が次の時代の「三位一体」や「二性一人格」の教義として実っていくわけです。ですからこれらの教義も根本的にはキリスト教的思惟の概念枠を示すものとして、すなわち解釈の結果よりも思惟の方法を示すものとして理解した方が良く、私は思います。

他方では、教父たちが常に哲学からの問題提起に対して誠実に答えていった姿勢にも学ぶべきだと思います。神の言葉は究極的には人間の理性を超えているわけですが、それは理性を用いての探求をやり抜いた後に言え

ることであって、最初から理性を放棄したり、自然理性と全く異なる枠組みを立てることではないのです。私はヴァン・ティルの弁証論については初歩的な知識しか持たないのですが、*The Deffence of the Faith* で彼が示した自然理性と新生した理性の区別は明快すぎて、2種類の理性の間の対話可能性についての考察が不十分なように思いました。教父を学ぶようになってみると、彼らのこの問題への取り組みは遙かに苦闘に満ちたものであり、簡単にこの世の理性からキリスト者を切り離すことはしていないことに気づきました。それは聖書の知恵思想やロゴス思想の上に成立する彼らの思想構造に由来する態度であったと思います。すべての知恵の根源が先在する神の知恵、神のロゴスたるキリストにある以上、この世の知恵はどれほど罪によってねじ曲げられたとしてもなお神についての真理に結びついているのであり、神の啓示を正しく理解するためにこの世の知恵を用いることもまた（条件付きながら）必要不可欠だ、との確信が彼らにはありました。

従って、この世の知恵（哲学）と神の知恵（啓示）とは連続性と非連続性の両面の契機を含んでいることになります。自然的理性とキリスト教的理性との関係は二者択一ではなく、前者から後者への移行は聖霊の働きによりつつ漸進的に起こるべきものだといって良いと思います。私はこの事態を「思惟構造の聖化」として考えてみようと思っています。

(3) 自分が置かれた社会・文化との相互連関の中で聖書を読むこと

教父たちは、ギリシャ的教養という共通の条件の下で神の言葉が表す真理と格闘し、三位一体やキリストの二性一人格といった優れてキリスト教的な思惟の確立に至りました。現代の日本という彼らとは異なった（ただし連関は確かにある）思想的背景の中で聖書の教えを受け入れ、理解し、他人に説明しようとする私たちにとって、彼らの思考の結論（教理）に劣らず、彼らの思考の過程に学ぶことは重要であると思います。いわゆる文化脈化（コンテクスチュアライゼーション）の問題ですが、それが無原則で便宜主義的なものにならないために、西洋社会自体がキリスト教をコンテクスチュアライズしていった過程を学び、彼らの問題意識を理解した上で自分たちに当てはめて考える re-contextualization が必要なのです。

キリスト教が少数者である日本や同様の宣教地にあつては、特にコンスタンティヌス体制以前のキリスト者たちの思考方法から学ぶ必要があると、私は思っています。社会的弱者の立場で、権力に頼らず真理それ自体の力によって、多数者かつしばしば迫害者である異教徒に理解できる用語と表現を用いて、聖書の真理を弁証していった彼らの努力こそが、我々の学ぶべき模範であると思うのです。

(4) キリスト教思想の根本を問う作業

最後に、すべてのキリスト者に共通の思想的祖先である教父たちから、「我々すべてが共有する信仰の遺産」を学ぶことが重要です。彼らを取り組んだ課題、三位一体論や二性一人格の教理は、「これがなければキリスト教ではない」、「ここを外したら救いはない」という意味で福音のもっとも肝要な基本的枠組みでありました。彼らの文字通り命がけの取り組み、身を削るような妥協のない論議は、まさしく福音を福音として伝えるための戦いであり、もちろん彼らはそのことを自覚していました。逆に言えば、それらの根本的な信仰で一致していれば、些末な教理上の違いや文化・習慣の相違は問題にされませんでした。彼らが問題になるのはキリスト教が国教としての権威と統一された権力機構を備えるようになってからのことです。教父たちの取り組みを学ぶことにより、我々はキリスト者が聖書の福音にしっかり立つために「譲ってはならないこと」を知り、それ以外の「違いを受け入れあうべきこと」をも理解できるようになります。真の超教派、真のエキュメニズムの基礎はそこにあると私は思っています。

終わりに

福音主義信仰をキリスト教の伝統の主流として理解する神学者として、日本ではアリストアー・マクグラスがよく知られています。私もマクグラスの著作から教えられてきたことは多くありました。同じ線で、特に教父と福音主義の連続性を追求している神学者にトーマス・C・オーデンがいます。Ancient Christian Commentary on Scripture の編集者です。彼が J・I・パッカーと共著で福音主義の基盤について論じている本がありますが、このように 2000 年のキリスト教思想を一貫する中心的思想として聖書に

対する信頼に基づいた福音主義を確立することが今必要とされていると思います。日本のキリスト教は伝統が浅く、それは神学思想の脆弱さとなって現れやすいのですが、逆に言えば西洋キリスト教の伝統からある程度自由に、その伝統を再評価できる立場にあるわけです。私はその初歩の段階でとどまっていますが、こうした取り組みに当たる人が今後続いて出てきてくださることを期待しています。

<参考文献> (引用順)

細川勝利『21世紀をになうキリスト者へ』いのちのことば社、1987年。

山中良知『理性と信仰』創文社、1964年。

Cornelius van Til, *The Deffence of the Faith. Presbyterian and Reformed*, 1955, 1967³.

唄野隆『現代に生きる信仰』すぐ書房

ジョン・R・W・ストット『地の塩・世の光』すぐ書房

有賀鐵太郎『キリスト教思想における存在論の問題』創文社、1969年。

梶山雄一『空の思想—仏教における言葉と沈黙』人文書院、1983年。

平川彰他編『講座・大乘仏教9—認識論と論理学』春秋社、1984年。

Maurice Gilbert, ed., *La Sagesse de L'ancien Testament*. Leuven UP., 1979, 1990 rev.

P.- É. Bonnard, 'De la Sagesse personnifiée dans l'Ancien Testament à la Sagesse en personne dans le Nouveau'. in Gilbert, ed., *La Sagesse de l'Ancien Testament*.

John Day et als, eds., *Wisdom in Ancient Israel*. Cambridge U.P., 1995.

Roland E. Murphy, 'The personification of Wisdom.' in Day, *Wisdom in Ancient Israel*.

Witherington, Ben III, *Jesus the Sage - The Pilgrimage of Wisdom*. T&T Clark, 1994.

大貫隆『ロゴスとソフィア —ヨハネ福音書からグノーシスと初期教父への道』教文館、2001年。

竹田文彦「女性としての聖霊—初期シリア・キリスト教における聖霊理解」、『日本の神学』47号(2008年)所収。

アリスター・マグラス『キリスト教の将来と福音主義』いのちのことば社、1995年。

Thomas C. Oden, *The living God(Systematic Theology vol.1)*. Harper, 1987.

James I. Packer & Thomas C. Oden, *One Faith: The Evangelical Consensus*. IVP, 2004.

研究歴

- ① 「コーヘレトにおける神と知恵」 京都大学文学部卒業論文、1993年。
- ② 「『コヘレトの言葉』における一人称表現の繰り返し用法」 日本基督教学会近畿支部会研究発表、1995年。
- ③ 「『コヘレトの言葉』の構造と思想 — 一人称表現の用法をめぐって」 『基督教学研究』第15号、1996年。
- ④ 「『コーヘレト』の構造と思想」 京都大学大学院修士論文、1996年。
- ⑤ 「『人格化された知恵』とロゴス思想」 関西聖書神学校卒業論文、1998年。
- ⑥ 「知恵の人格性と一人称表現 — 箴言8章12節『私は知恵』の理解—」 『基督教学研究』第19号、2000年。
- ⑦ 「知恵の人格化と一人称表現 — 箴言8:12『私＝知恵』の理解」 『日本の神学』39、2000年。
- ⑧ 「箴言1～9章における、表現技法としての『知恵』の第一人称 — 『知恵の人格化』との関連で」 日本基督教学会近畿支部会研究発表、2001年。
- ⑨ 「『神の知恵』はロゴスか聖霊か — エイレナイオスとテオフィロスによる『神の知恵』解釈—」 日本福音主義神学会西部部会春の研究会議研究発表、2005年。
- ⑩ 「コーヘレトの『ヘベル』とブツダの『無常』の比較」 日本福音主義神学会西部部会春の研究会議研究発表、2008年（鎌野直人氏と共同執筆）。
- ⑪ 「龍樹とコヘレト — 日本の文脈における『空』を媒介とする諸宗教間対話の可能性」 日本宣教会研究発表、2008年（鎌野直人氏と共同執筆）。

著書

『科学時代を生きる宗教』北樹出版、2004年（共著）。第3章「聖書の世界と科学」、第8章「環境危機と宗教（キリスト教）」を担当。